# 中国の新聞紙面研究についての考察（下）

馬　挺*

目次



## 三、新聞編集論分野における紙面研究

### （一）初期の編集論

二十世紀初期、中国において出版された新聞業務に関する著作の中には、取材について論じたものは多かったが、編集業務についての専門分野としての論述はほとんどなかった。

一九二四年北平京報館から出版された、邵飄萍（振青）著『新聞学総論』の中に、「新聞紙の表と裏」という内容があるが、その中で新聞編集ないし新聞の紙面について論じた部分があったかどうかについては、その本の所蔵が不明なため、推測し難い。

1．周孝庵著の『最新実験新聞学』（一九二八年）

新聞編集学を専門的に検討しようとした最初の文献は、一九二八年上海時事新報館から出版された周孝庵著の『最新実験新聞学』にある第二編「新聞編輯（編集）法」であるとみられる。この中で著者はニュースと編集との関係から検討し始め、編集とニュース価値、編集方針の確定、編集部の組織などについて論じたが、とりわけ本稿と直接関連があるのは、第三章の「編集方針の確定」、第八章の「ニュース編集に着手」、第九章の「新聞排版（組版）の芸術」である。「新聞は一方で最新の事実を読者に報告しなければならず、他方芸術的手法で読者の感情を調和し、心を美しくさせ、おもしろく読ませなければならない。つまり新聞は芸術化するべきである」と指摘した。[18] しかし、詳しく議論されたのはニュース価値の判定や原稿の直し方などで、組版についての芸術化として論じたのは、紙面全体の構成ではなく、ニュース毎の行の長さ、つまりいわゆる「長行」と「短行」の問題を重点において検討したものである。[19]

これは、新聞はただ記事を並べて組めばそれでおわりというのではなく、美しくて読みやすくしなければという意識があったことは伺われるのであるが、まだ紙面全体にまで着目して考察していなかったように思われる。なお、見出しについては、第二編の「新聞編輯法」の中でなく、別に「新聞標題法」という第三編をたてて、詳細に議論されている。中国における新聞業務の研究は、早期に見出しのつけ方・作りを非常に重視していたことが一つの特徴であったことを裏付けている。

2．管翼賢編纂の『新聞学集成』（一九四三年）

管翼賢は「漢奸報人（日中戦争時代、旧日本軍に協力した新聞人）」といわれた。しかし、同氏は新聞を作った経験もあり、燕京大学など複数の大学で新聞学を教えたこともある。彼は教えた内容を総論、新聞（ニュース）、報紙（新聞）、世論、新聞記者、編集、副頁、取材など二十編にまとめて、延べ八冊の『新聞学集成』[20]を編纂し、当時北京にあった「中華新聞学院」の参考書として刊行された。その第二冊に「編輯（編集）篇」がある。

「編輯篇」の第四章は「標題」であり、第五章は「拼版（組版）」である。見出しについての論議を別にして、「拼版」の重要性ついて、管翼賢は「大部分は一種のバランスと比例、そして一人の建築家が欠かせない関係意識をもつ芸術家の仕事である」と述べている。また、「拼版」は編集の仕事の一つとして、新聞社の各部門の「製品」を集めて、毎日読者に一つの人格的な「体型」を提供し、新聞の顔を装飾するだけではなく、新聞に「心と魂」を与えて、読者に生命のあるものを捧げることであると指摘した。そのうえで、「拼版」は外観の問題に限らず、記事をどのように並べれば、読者が読みやすく、どのように載せれば新聞が売れるかという問題も考えなければならないと論じた。特に、第一面について、商店のショーウインドーにたとえて、読者の注意を最も引き寄せたい記事を一面に置くべきだと言い、また顔にたとえて、もし尊敬してもらいたいならば、その顔は「端荘（端正で、荘重である）」であるべきだと指摘したとともに、多くの新聞は一面に記事と目立つ見出しをできるだけたくさん掲載しているが、それは結果としては巨木が森に埋められていると同様であって、かえって注意を引き寄せられなくなると指摘した。

しかし「拼版」関する論議が延べ八頁あり、紙面構成についての考えがよく述べられているとはいえ、抽象的な議論がほとんどで具体的な分析は簡単で少ないといえよう。

### （二）一九五〇年代以降の編集論

一九五〇年代になると、中国の政治情勢と同じように中国の新聞学の研究は大陸と台湾と両側でそれぞれ行われて、しばらくの間はお互いの情況を知らず、交流もない状態が続いた。大陸の方は七〇年代に至るまで新聞学とくに編集論についての研究成果と見られる著作は見られなかった。

台湾側の研究については、大学の教材として『新聞採訪与編輯（ニュースの取材と新聞の編集）』（鄭貞銘著・三民書局）がある。上下二篇に分かれ、上篇で取材を、下篇では編集をそれぞれ論じている。編集の分野における紙面編集に関して、見出し、紙面、図版などを論じる章が設けてある。同著は紙面の基本認識として、編集の任務は原稿を分析・整理しまとめるとともに、その結果を簡単かつ明瞭に読者に示すことであると述べた。そのためには、見出しの活字の大きさの扱い、記事の書式、各種の図表の大きさ、そして紙面全体の配列など記事内容の重点、特質

及びその影響を鮮明に読者に表すことが肝要である。[21] 一方、紙面の設計に注意を払って、新聞の美しさを求めて読者を引き付けることも、編集の仕事の任務の一つであるが、しかし編集の最も基本的な任務は、記事を系統的かつ合理的に編集・配列することにあり、記事の重要性（ニュース価値）と互いの関連性・連続性、さらに読みやすさとを兼ね備えて紙面を構成するであって、内容を軽視して紙面の美観のみを追求することは、新聞業務の基本的原則に反すると指摘している。[22]

また、鄭禎銘の『新聞採訪与編輯』の「参考書目」の中では荆溪人、陳石安、胡傳厚三人のそれぞれの『新聞編輯学』を並べている。

一九八〇年代から、大陸側で新聞編集学とりわけ紙面編集について論じた著作としては中国人民大学の鄭興東らの『報紙編輯学』（一九八二年・中国人民大学出版社）のほかに、一九八五年に上海復旦大学叶春華の『報紙編輯』（福建人民出版社）がある。

専門誌の場合――

『新聞学論集』（中国人民大学新聞学部・中国人民大学出版社）から

『紙面言語試論』　鄭興東　第一輯

『新聞編集作業について』　包慧　第三輯

『紙面の配列と読者の心理』　鄭興東　第七輯

『新聞紙面の中の線とその利用』　龍玉書　第十二輯

『新聞大学』（上海復旦大学）から

『紙面をどうやって構成する(上・下)』　叶春華　第五(?)・六号

『新聞の編集方針試論』　叶春華　第八号

『新聞の紙面と読者の心理』　潘玉鵬　第九号

『新聞編集作業の特性について』　俞月亭　第十二号

『夕刊紙面の経営と配置について』　蔡雯　第十二号

『新聞紙面の構成及びその風格』　史履新　第十四号

『新聞学刊』（中国新聞学会連合会・中国社会科学新聞研究所）から

『外国新聞が中国近代新聞雑誌に及ぼした影響』　李斯頤　一九八六年四月号

『新聞紙面での形及び相互関係』　王甫　一九八六年六月号

などがある。

これらの著作の中で、鄭興東の著作を後に述べることにしたい。叶春華の『報紙編輯』は「新聞学基礎教材叢書」の一つであるが、それは文字どおりの「基礎教材」で、紙面作業の実際操作の内容がほとんどである。『紙面をどうやって構成する（上・下）』という論文も同様であるが、紙面上の配置方法の分類について、ユニークな見解がある。他の論文は概して実務的な問題を主に論じており、理論的に述べている箇処が少ないように感じられる。

### (三) 鄭興東らの『報紙編輯学』とその他

一九八二年初版の『報紙編輯学』は、大学の新聞学部の必修課目の教科書となり、五年間に二十万冊が発行されたが、さらに一九八七年には中国国家教育委員会の大学優秀教材一等賞を受賞した。その内容を修正し一九八八年に出版された「修訂本」は、字数が二十七万から三十二万に増え、頁数も三百二十三頁から四百七頁に増加した。（以下『報紙編輯学』に触れるとき、特に説明がある場合を除いて、すべて一九八八年版の「修訂本」とする。）

『報紙編輯学』の主な内容は、新聞編集学の研究対象、編集作業の特徴、原稿の選択と直し、記事の配置、見出し、紙面、報道の構成、図の編集と副刊の編集である。

他の新聞学あるいは編集学の著作と比べると、『報紙編輯学』は紙面に関する論述を特に重視していると見られる。本稿の考察内容と直接関連があるのは、第六章の「版面（紙面）」であり、八〇頁で全体の四分の一の量を占めている。量が多いばかりでなく、内容もまた、紙面をめぐってその役割、配列の考え、空間（場所）、配列の手段、配置の構造、美化、設計に重点をおいた詳細なものになっており、第六章だけでも図版が五十九点も使われている。

当時の紙面編集分野の研究においては、二つの傾向が存在している。すなわち、紙面編集学は実践性が非常に強い分野であるが、それについての研究は抽象的な論議に止まって、実際の編集作業にあまり役立っていないという傾向と、もう一つは実際の作業の具体的な方法をめぐって議論はするが、理論上の検討があまり行われず議論の普遍性に欠けるという傾向である。しかし『報紙編輯学』における紙面についての論議は、抽象的理論上の論述と実践についての検討とを緊密に結び付けて行われており、どちらかと言えば理論的分析が編集作業上での具体的問題を引っ張って議論されているように感じられる。

なお、論文『紙面言語試論』の中で、鄭興東は「紙面は一種の特殊な評論で、文字で書かれた評論ではなく、一種の独特な言語を利用して書かれる」と述べ、初めて「紙面言語（原文：版面語言）」という概念を取り上げ、その発展、運用、表現力などの角度から、議論を展開した。『紙面の配列と読者の心理』は印象・注意・興味など読者心理の角度から紙面の役割を考察したものである。この二つの論文は『報紙編輯学』での紙面に関する論述の補足とみられるものである。

『報紙編輯学』および『紙面言語試論』と『紙面の配列と読者の心理』の内容についての具体的な考察は第二節に委ねる。

## 第二節　昨今の中国における紙面編集理論について

『報紙編輯学』の第六章の執筆者であり、そして論文の『紙面言語試論』と『紙面の配列と読者の心理』の著者でもある鄭興東教授は、中国人民大学新聞学部で教鞭をとっている。

本節では、鄭興東氏の紙面編集についての論述を参照しつつ、その他の論議を参考に、現代中国の新聞界における紙面編集の理論上の特色と紙面編集のおよぼす影響力についてのいくつかの観点を整理してみたい。

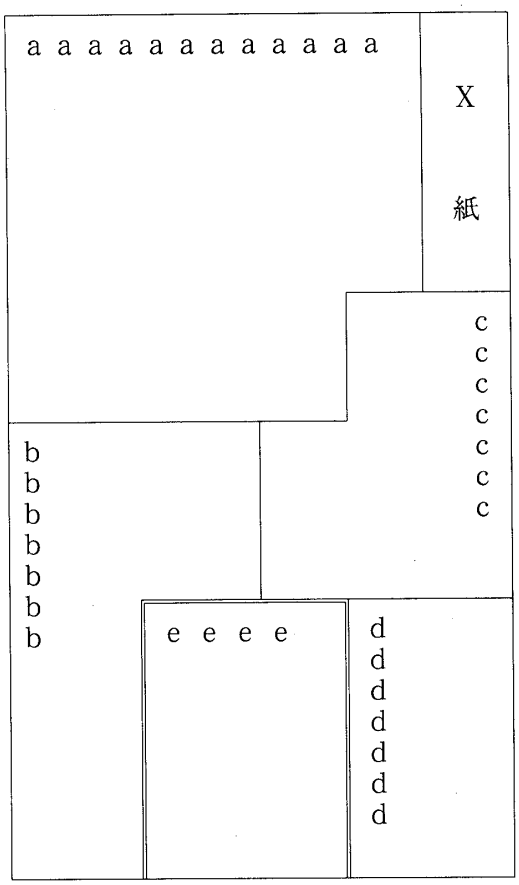
### 一、紙面と「紙面言語」

新聞の紙面は原稿に「空間」すなわち「場所」を提供する。だが、それだけではなく、掲載されている記事への評価もする。

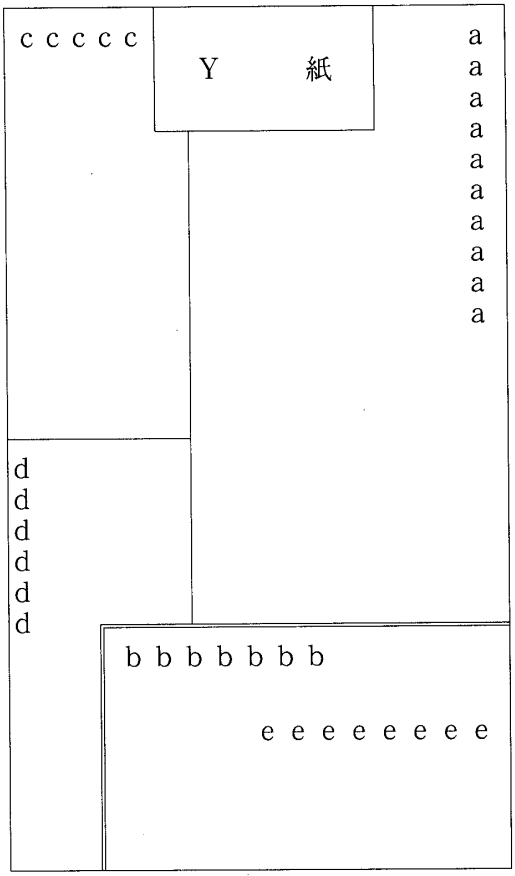
例えばX紙とY紙の二つの新聞があり、ある日X紙Y紙とも一面に同じ内容のa・b・c・d・e五つの記事を載せている。しかし、紙面での扱いが異なっている。

X紙はa記事をトップに取り上げて、かつ二段通しカット（二段の高さで左から右までいっぱいを占める）の見出しを使った。そして、b・c・d記事をそれぞれ紙面の左下、右中、右下の順においてまたe記事を箱ものにして罫線を囲んで中下に置いている（図－1）。

Y紙の場合には、同じくa記事を右のトップにしたが、見出しはたった六段の長さしかない。そしてc記事を左上に、d記事を左下にそれぞれおいて、また四方巻きの罫線でbとe記事を一緒に右下に囲んでいる（図－2）。




（図－1）




（図－2）

このような二つの紙面を見ると、仮に記事の文章と見出しの言葉使いがすべて同じであったとしても、X社とY社によってその五つの記事に対する評価は著しく異なっているとみられる。つまり、a記事に対してはY社よりX社の方が重要視しており、c記事はY紙の方が重視し、b記事とe記事についてはX社が無関係と判断しているのに対して、Y社は何らかのつながりがあるとみている、などといった違った評価を紙面の扱いで表していることになる。

このような評価は実は一種の評論といえるものであり、もちろん一般の文字で書かれた評論ではなく、一種の独特の「言語」を使って表しているものである。このような言語は「紙面言語」と名付けられている。そもそも新聞は大体三つのルートを通じて、編集部自身の意思を読者に伝える。第一には記事（写真、図を含む）の内容と見出しの文字による表現で直接的に訴える。第二には、場所つまり記事の紙面に占める位置の違いと見出しの大きさ、また記事と記事の組み合わせなどで間接的に表す。第三には、罫線、色などいろいろな装飾などの手段で、記事の内容を強調したり、抑えたりする。その第二と第三のものがいわゆる「紙面言語」である。「紙面言語」を通じて、編集者が記事・図版などを評価しながら、読者に提供するわけである。

「紙面言語」を通した評価は、まず、総体的な評価であり、つまり一日の新聞や一面に若干の記事があり、それを紙面に配列するとき、それぞれの記事を孤立的に扱っているわけではなく、すべての記事を互いに比較して重要さをはかる。したがってそれぞれの記事は紙面全体の中の一部で、一つの記事はその紙面での地位（ただの位置ではなく、紙面で

の位置に見出し・装飾などの扱いで与えられたもの）と紙面の全体と関連している。

そして、このような評価は新聞の発行までになされた評価のうちの最後のものであり、原稿自体、その取捨、直しによる評価はみな紙面全体での扱いによって再評価される。ただ、紙面ができあがって読者に届くと、直す機会はなくなり、したがって、紙面編集は誤りを犯すと訂正も効かない。

また、紙面は一番最初に読者に影響を与えるものである。つまり、読者がまず受け取るのはそれぞれの記事の具体的内容についてではなく、紙面で編集者が与えた評価である。紙面の配列に誘導されて、読者は紙面に掲載されている記事を読むわけであり、どの記事が重要なものとして扱われているか、読者はほとんど無意識的に誘導されているのである。また、いかに重要な記事であっても、目立つように扱っていなければ、読者が見逃がしてしまうこともあり得る。

さらにまた、紙面での評価は特殊な手段を使って行う評価で、文字での評価を主にしておらず、紙面の空間、配列、構造、そして編集手段を通じて評価を実現するわけである。

紙面で評価を行う「紙面言語」は、次の二種類の基本材料で構成されている。一種は場所、つまり紙面上の段、区、面の紙面のベースであり、一種は罫線、活字そのもの、色（白地も含む）などである。これらは「紙面言語」の物質的材料とも言えよう。

## 二、「強勢（強さ）」・感情そしてバランス

「紙面言語」の基本材料はそれぞれ特定の意味をもっているとみられる。一つは一定の「強勢」、つまり強さを表している。もう一つは特定の感情を表している。

### （一）「強勢」

まず、紙面配列における位置の「強勢」について、一つの記事を一面に置くか、あるいはその他の面に置くか、トップにするか下に綴じ込むか、そして見出しの活字の大きさによって、その与える印象の強さは違う。それぞれの国と新聞によって位置の強さについての考えは違う。現在の中国の新聞は一般的に一面は最も重要で、そして三面、二面、四面の順となり、面毎については、新聞のタイトルの位置との関係があるが、普通は左上はトップの位置と見られ、そして右上・左下・右下の順である。[23] また、いくつかの記事を紙面にそれぞれの場所に置いているなら、それらの記事はそれぞれ自身本来の強さを表すのである。しかしその中のいくつかの記事に関連性があると認めて、一カ所に集中させたり、囲みで囲んだりすると、強さが増幅される。編集者はとくにコメントを加えなくてもこれらの記事の間に一連の繋がりがあり、そのことによってある評価や評論をしているのだと読者に感じさせる。つまり、記事に与えた位置によって、異なる強さが与えられて、編集者の評価がそこに現れていることになる。

そして、見出しの「強勢」について、一つの記事の「強勢」は記事の本文の占める紙面の空間よりもむしろ見出しが占める空間よって示されている。中国の場合には、見出しが紙面に占める長さで「強勢」をはかり、つまり見出しが長ければ長いほど強い（普通は見出しが占める欄の数で表現し、三欄見出しや六、五欄見出し、通欄などという）。図版の場合には、その面積で「強勢」をはかる。

谒伦敦马克思墓

萨特——进步人类的朋友

中日交流话中医

耶路撒冷今昔

没有汽车的威尼斯城

归燕之谜

国际副刊

（図-3）

また、白地の強さについて、一つの紙面の中で読者の注意を引き付けるのは活字いっぱいの部分ではなく、わりあい白地が多いところであるようである。例えば、一つの大きい活字をいっぱい詰み込んでいる見出しと、同じ面積を占めている白地を背景にして、比較的小さい活字で組んだ見出しを比べると、後者は鮮明で、より目立った、美しいものに見える。図-3は一九八〇年五月五日の『人民日報』の七面で、その左上のマルクス墓地の絵と下の詩を組み合わせた一つの四方まきの「箱もの」は、白地が上手く使われている一例である。

## （二）感情

罫線、活字の字体、色は特定の感情を表す。例えば、花模様の罫線は活発的で、太い黒罫線は哀悼の意を表す、などである。字体については、楷書体は生々しく、明朝体は荘重である。赤い色は嬉しさを表すなど、使用の方法によって編集者の感情や記事への褒貶が表れる。また、中国の新聞記事の内容文は、ニュースとそれに準じる内容の活字は明朝体で、社説、評論文、編集者のコメントと写真の説明文は楷書体を使用するのが通例である。

·4·　文　汇　报　1980年4月13日　星期日

美（短篇小说）

满江红　悼念刘少奇主席　夏征农

郭老谈庄子

迎鉴真大师像归国

江山多娇　摄影丛刊　第五期《黄山》要目

上海市汽车配件供应公司　举　办　一九八〇年春季汽车配件供应调剂会

（図－4）

### (三) 紙面のバランス

一つの紙面の局部と全体、また見開きの紙面の間の統一性とバランスへの考慮も払わなければならない。このような紙面の平衡を保つことについて、「調和（和諧）」、「釣り合い（比例）」、「秩序」、「均衡」の四つの要素が重視されている。つまり強さというのは、比較してからはじめて存在するのである。「弱い」ものが存在していてこそ「強さ」が感じられるはずであり、すべての記事がすべて最も強いものを示そうとすれば、結果として皆強さがなくなる。

『文匯報』の一九八〇年四月十三日付の四面を例として検証しよう（図-4）。その面の主な内容は『美』という題目の小説で、タイトルは一字しかないが、その紙面幅の半分を占める白地を背景にし、そしてバレーの女優の絵を加えていて、非常に強い印象を与える。本文は長いが、紙面の周辺と真ん中に詩・絵・随筆などが加えられているので、読者はさほど冗長さを感じないであろう。そして左上の小説のタイトルに対して、右下に一つ四方巻きの随筆があり、また右上と左下のそれぞれ詩と絵を対応させ、真ん中の小説の内容を描く挿絵もあり、紙面全体がバランスをとりながら、変化が現れている。下のほうが少し「重い」と感じるが、白地を贅沢に与えられる詩の囲みの存在が、重さを調整している。この紙面は読者に美しい印象を与える一つの優れた紙面と言えよう。

またその反面、ある記事を極端に強調して紙面全体のバランスが失われると、通常は読者に不快感を与えて、よい効果は得られない。だが、特別の場合には編集者はわざとアンバランスの紙面を作り文字では書けないコメントや感情を表そうすることもある。[24]

## 三　読者心理についての研究

中国における新聞紙面と読者心理についてのこれまでの研究の大部分は、まだ初歩的であり、紙面が読者に与えた印象、紙面に対する読者の注目度、紙面と読者の興味などをめぐる論議に終始している。

読者はたいてい紙面から新聞に対する第一印象を与えられる。紙面から読者に今日の新聞を読もうという期待感を与えないと、その紙面は失敗したと言える。とはいえ、ただ紙面に対する第一印象がよくても、実際に読んで得た印象とかなりずれると、かえって読者に不信感を与えることになる。つまり紙面の構成は内容と一致することが大原則と一般的に認められている。

読者に新聞を読むようにさせるためには、新聞に読者の注意を引き寄せなければならない。その注意は無意識的な注意ともいえるものである。紙面の構成は読者の無意識の注意を引き寄せる重要な手段で、紙面で表す「強勢」の差によって、読者の注意を喚起する。この問題について図と空白という二つの手段がとくに重視されている。紙面にある図や写真などが一目瞭然で、優先的に読者の視線を引き付ける。また、空白や白地を効果的に使えば注意されやすい。

興味について、紙面の構成はできるだけ読者の閲読興味を壊さないように作るのが重要であると言われる。例えば、長い記事は読者に一般的に嫌われるが、掲載するときに紙面での配列を工夫して、できるだけ長く見えないようにし、また数字が多い内容の報道すれば、絵やグラフなどを使って、内容をわかりやすくするほうが読者の興味を引きやすい。

## 後書き

本稿の資料収集は一九九〇年代初頭までである。その後、「改革・開放」政策の実行はマスコミ分野にも滲透しつつあり、そして日本のスポーツ紙をはじめとして、香港、台湾などの新聞紙面の影響を受け、また、電子組版が導入されたことも一因となって、中国の新聞紙面は目まぐるしく変化した。これらの変化について、また機会があれば検証を続けていきたいと考えている。

（続巻）

**注**

(18)『最新実験新聞学』一七九頁

(19) 同前二四六頁

(20) この著作は非売品だったので探すのが難しいといわれ、台湾にいる中国新聞史の専門家である朱傳誉氏も一冊しか見たことはなかったという。（『中国新聞事業研究論集』一一頁）幸いに上智大学図書館の中に、その八冊とも揃っている。

(21)『新聞採訪与編輯』三四八頁

(22) 同上三六四頁

(23) 縦書きをおもにしている日本の新聞とは異なって、中国の新聞は横書きであるため、この点についての扱いはかなり異なっている。

(24) この「特別な場合」の実例について、一九八九年天安門事件の際、「人民日報」の報道姿勢に対して考察を行った拙稿の「中国の新聞紙面についての一考察――一九八九年四～六月の『人民日報』を中心に」を参照して下さい。

**参考文献**

徐宝璜　『新聞学綱要』（上海聯合書店・上海・一九三〇年）
任白濤　『応用新聞学』（亜東図書館・上海・一九二八）
周孝庵　『最新実験新聞学』（上海時事新報社・上海・民国十九年［一九三〇年］再版）
管翼賢纂修　『新聞学集成』（中華新聞学院・北京・一九三〇年）
頼光臨　『中国近代報人与報業』（台湾商務印書館・台北・民国六九年［一九八〇年］）
曾虚白　『中国新聞史』（三民書店・台北・民国七三年版［一九八〇年］）
鄭貞銘　『新聞採訪与編輯』（三民書店・台北・民国七九年［一九九〇年］）
鄭興東等　『報紙編輯学・修訂版』（中国人民大学出版社・北京・一九八八年）
王鳳超　『中国的報刊』（人民出版社・北京・一九八八年）
史和・姚福申等　『中国近代報刊名録』（福建人民出版社・福州・一九九一年）
拙稿　「中国の新聞紙面についての一考察――一八九八年四～六月の『人民日報』を中心に」（専修大学人文科学研究所月報・第一五三号・一九九三―四）